

灯火の壁

新鮮、偉大、

愛泪ぐみ

灯火の壁に

今宵もいのる

村の乙女

美さながらの

村の乙女

明い空気が

錦繪のやうに

大鍋

大鍋に

こねて煮られた食ひもの

顔、顔、顔

ともし灯

農女

野べの光に黒髪は燃え

瞳は悩み

手鞠見たいに

飛び行く農女

木綿絣を織り上げた顔

糠俵、馬糞、乾草

歪んだ柱

木綿絣を

織り上げた顔

道遠いかな

果敢ない泪

白い泪

足音胸に返り

行けば夕焼けの道遠いかな

閨の女工

真夜中の閨の女工ら

伸びた手足

髪の毛

星あかり

暗らがりの河床

日は落ちぬ

つめたき木立くぐまり

水は

暗らがりの河床に満つ

星も及ばず

星も及ばず

地は暗らがりの固疾
かれ

深き根を地獄にもつ

苦惱の夜

地下室

脱け穴

裸形の手足絡み合ひ

苦惱の夜を綴る灯火

夜の谷間

名も知らぬ鳥羽ばたき

暗き雲

ひそびそと湧く

夜の谷間

長恨歌

風は吹いて淋びしく

月は彼方に昇る

美なるかな昇る月は

君も今宵は逍遙の人なるか

夜は森々と更けわたり

球磨の流れは静かであらう

ああ君、去り給へる人、

妾はいま何を眺めよう

妾は遠く人生を眺めてゐる

そして東の空を眺めてゐる

そして考へる

不幸か悠久かのどちらかを

春も始めとなりぬれば

笛を手に持ち柴の戸に

秋も半ばとなりぬれば

風を悲しみ高樓に

さて妾は知らない妾の知己が

何處にゐるか云ふことを

妾が恠うして靠れるものは
野の一本の松の木ばかり

お前は何處にゐるのかと
人が訊くなら答へよう
妾はいつも此處にゐる
此處に靜かに立つてゐる

風は蕭々と吹いてゐる

妾は寂びしい

妾は孤獨であることを知らないが
愛されてゐないことを知つてゐる

妾は愛を求めない

妾は愛を待つてゐる

妾は求めようとしな

求められたいと願ふ

愛する者は男よあなた

愛される者は女よわたし

妾が何を云ひませう

ただあなたに靠れるばかり

あなたに靠れてうつつなく

妾が夢をしほるなら

夢の雫は花かとばかり

青春の日の床に咲く

何て夜の美しいこと

そしてあなたの優しいこと

女よ娘よ可愛い子よと

あなたは仰有る微笑んで

月の光があゝの森を

あれまあんなに暗くする

女よ娘よ可愛い子よと

あなたは仰有る微笑んで

ああ妾は知らない妾の知己が
何處にゐるかと思ふことを

妾が慙うして靠れるものは

野の一本の松の木ばかり

風は吹いて淋びしく

月は彼方に昇る

美なるかな昇る月は

君も今宵は逍遙の人なるか

武蔵野にて

—

悲哀と自由との妾を

誰が拒み得よう

妾は歩む

飛ぶ昆虫が屢々妾のものの思ひを

よび醒ますことさへ知らないかの如く

空は小徑と無限との涯に

置かれてある

なぜなら妾は

斯く小高い斜坂の上にいるのだから

願はくばもの静かに

我をして他に移さしめよ
午後が織りなす恍惚の
斯くも優しく身に沁みわたる
天の下なる武蔵野に

人が野の中で話してゐる
彼は野の飛雲と一致してゐる
人生を語る若い何ものも

美と恍惚の中には見えてゐない

二

美なる過多なるものよ
妾はいま歩み入る
世は蕭條と更けわたり
秋とはなつた

彼方の丘に日は照り
野の花は風に吹かれてゐる
誰が駆け下らないでゐられよう
斜坂から黄金の野へ

人は穀束をかついで
並樹の間を行く
手を叩いて妾がよぶと

雲は妾をさして下りてくる

美よ

遠景となれ

妾から退け

斯くて屢々妾は歩みを返へす
夕日の野から

夕べの戸口へと

三

富める夕べの野から

貧しい夕べの戸口へと歩みを返す時に

無爲な机が妾を待つてゐる時に

妾は有名なかんしやくを起す

その有名なかんしやくが

何を妾にもたらずか

天は高く地は低く

妾は人間と云ふ女であつた

ノートよ

たまらなくなると

妾はお前を出て

お前にすつかりお話をする

するとお前は

おとなしく聞いて呉れる

お前を離れて群衆の中に這入ると

妾はおどおどして仕舞ふ

すると妾は

どうですロマンチストさんと

自問自答して顔を赤くする

四

空に鳴る物の音

そは光と風とに充てる

聖き午前が

われらの上を過ぎ行く物の音

日は沈黙し

樹は並んでゐる

樹は緩やかな傾斜に沿ふて

並んでゐる

幾つかの優しい丘と

美なる草地との彼方には

自働車隊の屯營が

赤い建物を見せてゐる

地は波打ち林は打ち續く

斯くすべてのものは打ち續く

さて豪徳寺の鐘の音が

けふも背後に迫るであらうか

五

野の樹木や水蒸氣や

石多い傾斜地や

荒い耕地の中に

花麗なものを妾は求め過ぎた

花麗も自由も恍惚も

そは武藏野の何ものでも無かつた

武藏野は阿呆の如く

大馬鹿者の如くしか展がつてゐない

妾をして云はしめよ

詩人は根氣がいいと

更らに云はしめよ

彼はよくないと

詩人は渴いてゐる

彼は不自由と病氣とに渴いてゐる

彼は暴戻な無茶な行爲に渴いてゐる

たえず妻は寂びしかつた

思ふには

孤獨の歌を歌ふには

母なる大地は餘りに自由であり過ぎると

六

ロマンチストよ

汝自身を友とせよ

汝が渴ける胸を

すべての粗野なる物の上に投げ與へよ

斯く汝は抛棄し

汝自身の優しき洗禮を受く

さて朝々の樂しき丘に

美はありて汝を待つ

日の霞める烟波のなかに

木立は赤く立ち並び

一千年の昔このかた

わが逍遙は昇る朝日に立ち向ふ

七

飛ぶ昆虫の金銀の碎粉も

白く驚くべき雲の羊群も

明暗一帯の晝の野の移動と共に

斯く晝深く移動する

斯く晝深い時

民家は戸口を閉ぢ

乙女たちは水を汲みに

丘の上から下りてくる

折しも太陽は燃え輝き

美は白晝に薰じ匂ふ

なぜなら乙女よあなたの髪が

眞つ白な布で包まれてゐるでは無いか

夕日は農家の屋根の上にかかつてゐる
屋根の下には無限の秩序が保たれる
女たちは火を焚きつけ
子供は窓で何かして遊ぶ

野は末遠く美しく
屢々その趣き深い一隅に
黄金の樹並みを見せる

その時草原に獨り立ち
深い思ひに妾は沈む
黄金の葉の散らばる谷の
美なる寂びしい思ひに

青春さへも

いまは妾に無用である

何を夢みてよろこび

また何に媚びよう

人の世の歡喜や自負は

各々の夢をば何處に結ぶのだらう

草むらかけに鳴く虫の優しさ

衣手に散る白露のなづかしさ

十

神よいづくに向ひて泣く可きか

美しき過ぎし日の思ひ出も

いまは歡びとなりて心に迫る事もなく

今年もいつか冬とはなりぬ

夜更けに獨り起きるて

靜かに書見すれば

月は空高く昇り

野は無限に黄ばみわたる

古里の優しき谷に

母はわが歸る日を待ち給ひしが

さて死んで白骨となりたまひぬ
されば白骨の歌こそ面白からずや

藪の中より

ふと白骨を掘りいだし

叩けばコツコツと音して平凡なり

十一

春風がそよそよと吹いて

妾は有名になつた

つつしんで春の太陽に訊ねる

さて何を妾はしようか

云つて呉れるな

あなたの御本領は詩作ですなどと

なぜ我々は詩作の爲めに
苦しまねばならないのだらう

妾が詩人であらうと

妾が小説家であらうと

それが妾に何であらう

妾は夕日を眺めてゐる

夕日と月光とが妾を慰める
 また大森林と谷間とが
 古城趾と一軒屋とが
 そのお爺さんとお婆さんが

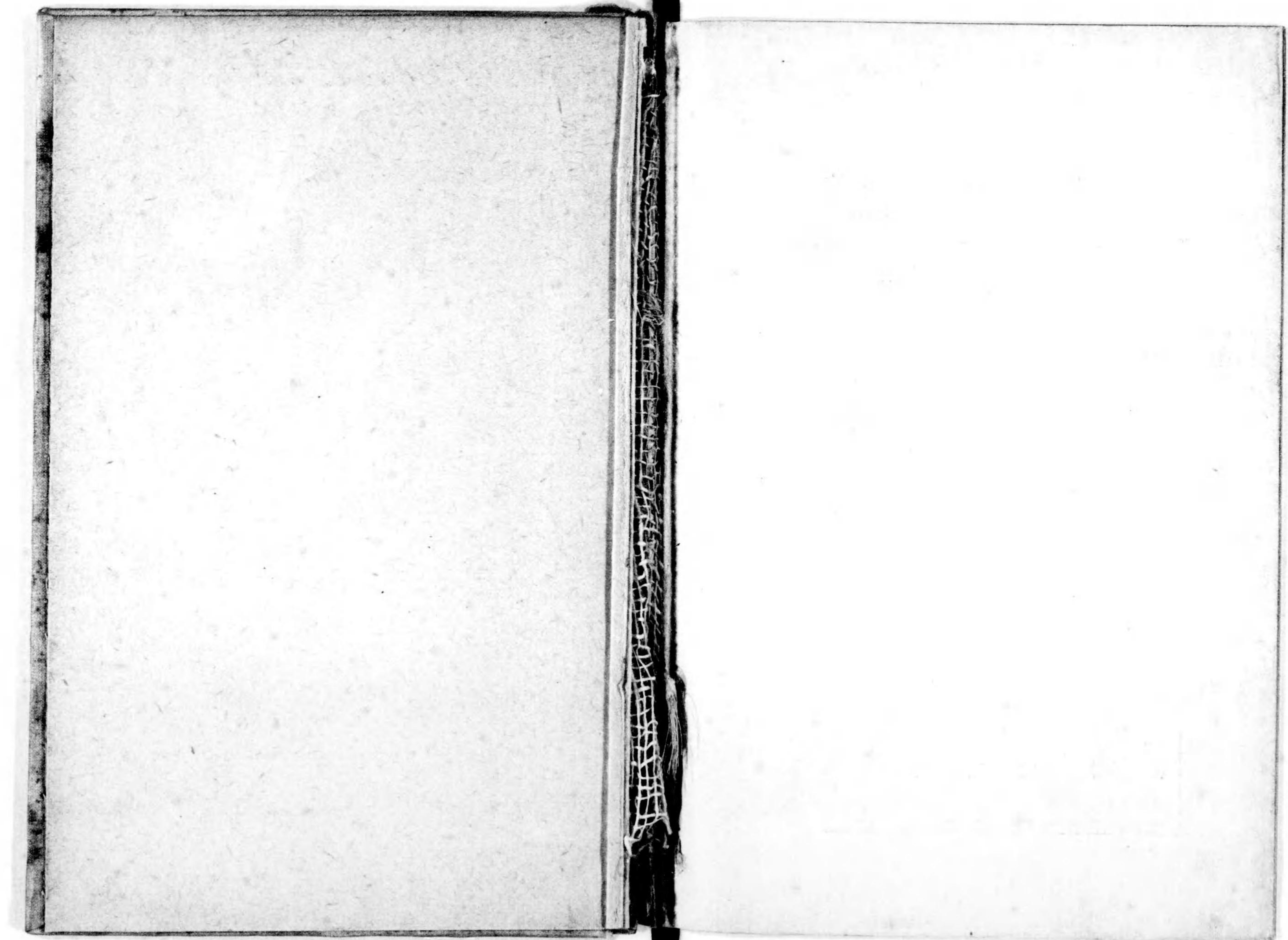
大正十一年二月二十日印刷
 大正十一年二月二十五日發行

美 想 曲
 定價金壹圓三拾錢

著 者 高 群 逸 枝
 東京市神田區表神保町十番地
 發 行 者 福 岡 益 雄
 印 刷 者 谷 口 熊 之 助

發 行 所

東京市神田區表神保町十番地
 金 星 堂
 電話神田(三八五三番
 四八三一番
 振替東京三三二八番



終

